

令和3年度 とっとり学力・学習状況調査

報告書

一人一人の成長を支え
確実に伸ばす教育を目指して

令和4年2月

鳥取県教育委員会

目次

| | |
|--|----|
| 第1章 調査の概要と結果 | |
| (1) 調査の概要 | 1 |
| (2) 調査結果の概要 | 3 |
| (3) 調査に関する Q&A | 5 |
| 第2章 調査結果の活用 | |
| (1) 個人結果個票の見方について | 10 |
| (2) 主体的・対話的で深い学びの実施と 非認知能力・学習方略に関する分析について | 13 |
| (3) 帳票を活用した分析について | 18 |
| (4) 校内での活用方法について | 22 |
| 第3章 調査結果活用協力校の取組 | |
| 鳥取市立城北小学校 | 32 |
| 米子市立加茂小学校 | 37 |
| 第4章 特徴的な学校の取組 | |
| 鳥取市立明德小学校 | 42 |
| 鳥取市立面影小学校 | 44 |
| 八頭町立船岡小学校 | 46 |
| 倉吉市立西郷小学校 | 48 |
| 倉吉市立灘手小学校 | 50 |
| 倉吉市立関金小学校 | 52 |
| 米子市立明道小学校 | 54 |
| 米子市立五千石小学校 | 56 |
| 境港市立上道小学校 | 58 |
| 第5章 質問紙調査結果からみられる傾向 | 60 |
| 第6章 分析支援プログラムによる分析 (質問紙調査とのクロス集計結果より) | 75 |
| 第7章 参考資料 | |
| 今年度調査問題・公開問題 | 81 |
| 分析に係るスケジュール | 86 |
| 令和3年度鳥取県学力向上戦略図 | 87 |

第1章

調査の概要と結果

調査の概要や特長、結果について掲載しています。

また、調査に関するQ&Aも掲載しています。



鳥取県のマスコットキャラクター
「トリピー」

(1) 調査の概要

子どもたち一人一人の学力の伸びや学習状況を把握することにより、子どもたち一人一人の成長を支え、確実に伸ばす教育を進めます

小中学校の時期は、子どもの「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育む大切な時期です。伸びる時期やスピードは様々ですが、一人一人は一步ずつ確実に成長しています。

「とっとり学力・学習状況調査」は、「学習した内容がしっかりと身に付いているのか」という従来の学力調査の視点に、「一人一人の学力がどれだけ伸びているのか」という新たな視点を加えることで、子どもたちの成長を促すものです。

鳥取県教育委員会では、本調査を通して、市町村教育委員会と協力しながら、ととりの子どもたち一人一人の学力を確実に伸ばす教育を進めていきます。



とっとり学力・学習状況調査の「3つの特長」

◆特長1

毎年の学力調査の結果を見比べることによって、1年間の学習の積み重ねを「学力の伸び」として見るができます。

※「学力の伸び」は2年目以降の調査から見るようになります。

◆特長2

質問紙調査（アンケート）の結果から、ルールやマナーを守る意識や、目標に向けて粘り強くやり抜く力などがどれだけ身に付いているのかが見えるようになります。これらの力は、学力と強く関係しているといわれています。

◆特長3

調査の結果から、学力を伸ばしている効果的な指導方法を明確にし、授業改善や児童一人一人に応じた指導・支援をさらに充実させることができます。

令和3年度とっとり学力・学習状況調査の概要

◆期 日 令和3年5月11日（火）～5月20日（木）のうち任意の実施日

◆学 年 小学校・義務教育学校4、5、6年生、中学校1年生・義務教育学校7年生

◆調査事項 国語、算数・数学、質問紙調査（アンケート）
※出題範囲は、調査を受ける前の学年までに学習した内容です

◆結果の返却 令和3年8月24日（火）

※令和4年度は小学校・義務教育学校4年生から中学校2年生・義務教育学校8年生までを対象として、調査を実施する予定です

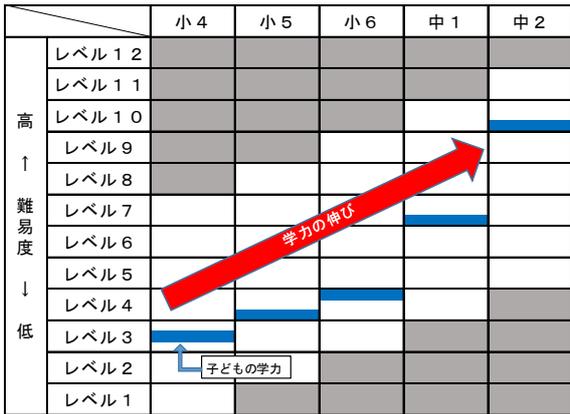
※令和4年度の調査事項は、国語、算数・数学、質問紙調査（アンケート）の予定です



とっとり学力・学習状況調査により、一人一人の学力の伸びを支援

とっとり学力・学習状況調査の特長

問題ごとに難易度を設定した学力調査を継続して実施することにより、子ども一人一人の学力の伸びを把握し、指導に生かすことができます。



◇全部で12のレベルがあります。(各学年で測定可能なレベルは7レベル)
◇1つのレベルをさらに3層(A~C)に分けています。

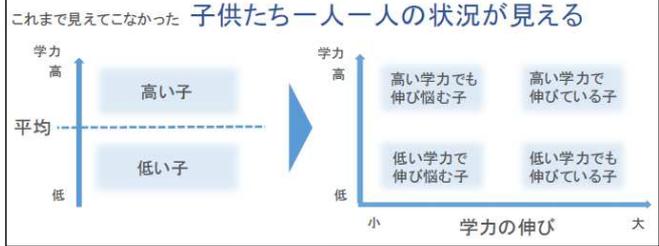
【埼玉県と協定を結び、共同実施を予定】

- ◇埼玉県は平成27年度から開始(毎年約30万人に調査)
- ◇一人一人の学力の伸び(変化)を継続して把握することのできる自治体初の調査
- ◇埼玉県は4年連続で全国学力調査の結果が伸びている
- ◇平成31年度から福島県と共同実施を開始
- ◇平成30年度プラチナ大賞で次世代育成賞を受賞
- ◇中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会(R1.10.29開催)において、本調査について報告

【項目反応理論 (IRT)】

- 出題するすべての問題に同一尺度で難易度を設定
- ◇異なる調査間での学力の比較が可能
- ◇PISAやTOEFLと同様の調査手法

学年ごとの難易度の設定範囲



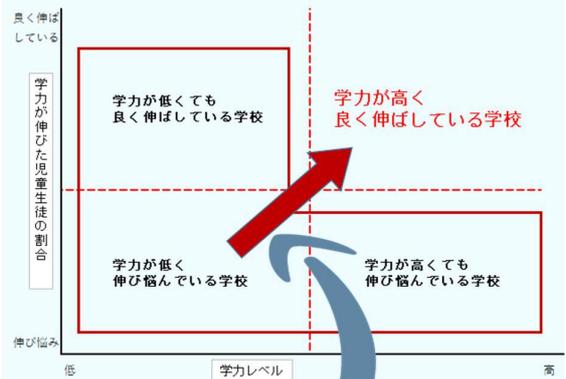
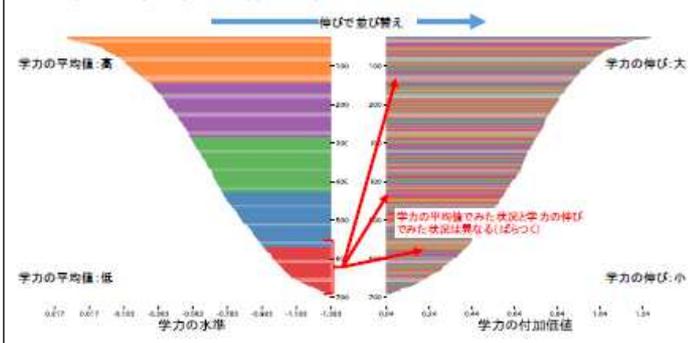
- 伸び悩む子どもには、つまづきを早期に発見し、支援が可能
- 伸びた子どもには、頑張りを認め、一層やる気を引き出したり、より高いレベルへの挑戦を促すための支援が可能

本県のスモールスケールを強みとした、児童生徒一人一人に応じたきめ細かな指導・支援の充実



とっとり学力・学習状況調査により、市町村教委と連携して学校を支援

＜学力水準と学力の伸びの状況＞



**学力が高い学校が学力を大きく伸ばしているとは限らない
(学力が低い学校が、学力を伸ばしていない学校とは限らない)**

学力の伸びの状況



学校の実情に応じた重点的な支援

- 管理職の効果的なマネジメントの推進
- 教員の授業力向上、授業改善の推進
- 効果的な指導を実施している教員が多い学校
- 教科や学力層を問わず学力を伸ばしている学校

市町村の枠を超えて効果的な取組を共有する仕組みづくり



(2) 調査結果の概要

1 調査の目的

本県の児童生徒の学力や学習に関する事項等を把握することで、教育施策や指導の工夫改善を図り、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

2 調査の特長

◇個人の学力の伸びを継続して把握することができる。

※学力の伸びが把握できるのは2年目以降

◇質問紙調査によって、非認知能力や学習方略を把握し、指導に生かすことができる。

※非認知能力：自制心、自己効力感、勤勉性、やりぬく力

※学習方略（学びに向かうときの態度や学習の仕方）：柔軟的方略、プランニング方略、作業方略、人的リソース方略、認知的方略、努力調整方略

3 調査実施日

令和3年5月11日（火）～5月20日（木）の期間で、市町村（学校組合）教育委員会・学校が設定した日

4 参加学校・参加人数

| | 参加予定数 | 参加人数 |
|---------------|----------------------------|---------|
| 小学校 義務教育学校 | 105校 (小学校101校、義務教育学校4校) | 12,855人 |
| 中学校 義務教育学校 | 46校 (中学校42校、義務教育学校4校) | 3,976人 |
| 特別支援学校 | 3校 | 7人 |
| 合計 | 154校 | 16,831人 |

5 調査事項

小・義務教育学校第4学年から第6年学年：国語、算数、質問紙（アンケート）

中学校第1学年、義務教育学校第7学年：国語、数学、質問紙（アンケート）

※学習指導要領に示された内容のうち各学年の前学年までの内容

6 埼玉県教育委員会との連携協定

本調査は、埼玉県教育委員会と締結した連携協定に基づき、調査問題の相互利用等をしながら実施する。なお、埼玉県では、平成27年度から埼玉県学力・学習状況調査として実施している。

7 調査問題の公表について

本調査は児童生徒の学力の経年変化を見とるための調査であるため、調査問題の内容については非公表とする。ただし、調査問題の一部については、調査結果をまとめた報告資料に記載する予定。

【調査結果の概要】（昨年度は鳥取市、米子市のみ実施）

◇本調査の目的は、平均正答率を比較することではなく、学力の伸びを継続して把握することである。本年度は鳥取市、米子市以外は学力の伸びを把握することができないため、平均正答率のみを示している。

◇当該学力・学習状況調査結果については、成長段階にある児童生徒の心情に配慮し、序列化や過度の競争等が生じることのないよう注意すること。

8 鳥取県の平均正答率（％）

| | 小学4年 | 小学5年 | 小学6年 | 中学1年 |
|-------|------|------|------|------|
| 国語 | 54.7 | 56.1 | 59.0 | 59.7 |
| 算数・数学 | 66.6 | 58.9 | 59.4 | 60.2 |

9 鳥取県のカテゴリー別正答率（％）

【国語】

| 分類 | 区分 | 平均正答率 | | | |
|--------|-----------------|-------|------|------|------|
| | | 小4 | 小5 | 小6 | 中1 |
| 教科の領域等 | 言葉の特徴や使い方 | 66.2 | 59.8 | 63.5 | 61.8 |
| | 情報の扱い方、我が国の言語文化 | 65.5 | 61.2 | 73.8 | 55.2 |
| | 話すこと・聞くこと、書くこと | 29.0 | 36.2 | 41.8 | 50.0 |
| | 読むこと | 39.0 | 57.4 | 54.6 | 63.9 |
| 評価の観点 | 知識・技能 | 66.0 | 60.2 | 65.3 | 60.0 |
| | 思考・判断・表現 | 33.4 | 50.8 | 50.7 | 59.3 |
| | 主体的に学習に取り組む態度 | — | — | — | — |
| 問題形式 | 選択式 | 58.1 | 56.2 | 61.4 | 57.0 |
| | 短答式 | 54.4 | 58.7 | 57.3 | 66.4 |
| | 記述式 | 14.1 | 24.2 | 29.6 | 42.8 |

【算数・数学】

| 分類 | 区分 | 平均正答率 | | | |
|--------|---------------|-------|------|------|------|
| | | 小4 | 小5 | 小6 | 中1 |
| 教科の領域等 | 数と計算 | 68.6 | 60.4 | 64.4 | 65.6 |
| | 図形 | 62.6 | 58.8 | 61.4 | 52.9 |
| | 変化と関係(小4は測定) | 69.4 | 58.5 | 59.2 | 59.9 |
| | データの活用 | 63.8 | 56.3 | 49.2 | 59.6 |
| 評価の観点 | 知識・技能 | 68.9 | 63.0 | 61.2 | 62.3 |
| | 思考・判断・表現 | 51.2 | 48.3 | 49.7 | 40.6 |
| | 主体的に学習に取り組む態度 | — | — | — | — |
| 問題形式 | 選択式 | 63.5 | 56.0 | 60.8 | 63.2 |
| | 短答式 | 72.5 | 64.5 | 61.6 | 58.4 |
| | 記述式 | 20.9 | 12.2 | 5.0 | 40.1 |

(3) 調査に関するQ&A

【Q1】

全国学力・学習状況調査と、とっとり学力・学習状況調査は何が違うのですか。

【A1】

全国学力・学習状況調査は、学力を平均正答率で表します。対象となる調査年度の児童生徒(小学6年生、中学3年生)のその時点での学力の現状を把握することには適していますが、実施年度が異なる調査の結果を比較するのが難しかったり、平均正答率を基準に考えるため個人や学校の学力の伸びを正確に把握しにくかったりするという課題があります。とっとり学力・学習状況調査では、異なる学年や年度間の問題の難易度を調整して学力を測定することにより、小学4年生から、中学1年生(令和4年度は中学2年生)まで、個別の児童生徒の学力が伸びていく様子をより明確に示すことができるようになっていきます。

また、とっとり学力・学習状況調査では、質問紙調査によって、児童生徒の学力の下支えとなる「非認知能力」と「学習方略」の状況を把握することができ、学力の伸びと併せて児童生徒の学びの力を総合的に見ていくことができることも大きな特徴です。

【Q2】

とっとり学力・学習状況調査の調査問題が、原則として非公開とされているのは、なぜですか。

【A2】

経年での伸びを測るために、同一の問題を年度を越えて出題する必要があることから、問題を原則非公開としています。とっとり学力・学習状況調査はOECDの生徒の学習到達度調査(PISA)や、TOEIC、TOEFLなどと同様の分析手法を使っており、こうしたテストでも問題は原則非公開となっています。

【Q3】

「学力レベル」とは何ですか。

【A3】

とっとり学力・学習状況調査では、様々な難易度の問題を出題し、それに対する正答や誤答の状況を見て、「学力レベル」を判断しています。そのため、全ての問題に難易度を設定しています。

【Q4】

問題の難易度は、どのように設定しているのですか。

【A4】

例えば、計算問題では、次の例のように難易度を設定しています。

| 問題の難易度 | 問題例 |
|--------|------------------------|
| 6 | $0.7 \div \frac{2}{3}$ |
| 4 | $5.6 \div 1.4$ |
| 3 | $52 \div 4$ |

割り算に分数も入るため、難易度がさらに上がって「6」となる。

割り算に小数が入るため、難易度が「4」に上がる。

整数同士の割り算である。本調査では難易度を「3」と設定している。

【Q5】

「学力レベル」は、どのくらい設定されているのですか。

【A5】

学力レベルはレベル1からレベル12まであります。各学年の測定は、次の表のように7レベルの間で行います。また、それぞれのレベルはさらに細かく3層（高い順にA→B→C）に分かれています。児童生徒には、学力レベルをこの小さな層で分けた1-Cから12-Aまでの36段階で提示されます。

なお、鳥取県では、今後段階的に学年を上げていき、令和4年度には小学校4年生から中学校2年生までの調査を実施する予定です。

| 学年 | 学力レベル | 学年 | 学力レベル |
|--------|-----------|--------|------------|
| 小学校4年生 | レベル1～レベル7 | 中学校1年生 | レベル4～レベル10 |
| 小学校5年生 | レベル2～レベル8 | 中学校2年生 | レベル5～レベル11 |
| 小学校6年生 | レベル3～レベル9 | 中学校3年生 | レベル6～レベル12 |

【Q6】

同じ正答率の場合、同じ学力レベルになるのですか。

【A6】

同じ学力レベルにならない場合もあります。

とっとり学力・学習状況調査の問題は、正答率が高いか低いかではなく、どの程度難しい問題に正答できたかでレベルが決まります。

例えば、AとBの児童生徒が同じ10問を解答した場合に、Aが一番易しい問題を1問間違えて、残りは全て正答し、Bが一番難しい問題を1問間違えたとします。この場合、正答率で考えると、AとBの学力はいずれも90%で同じということになりますが、本調査においては、より難しい問題に正答できているAの学力レベルの方が高くなります。

【Q7】

学力レベル7で考えた場合、小学校4年生の学力レベル7の児童と、小学校6年生の学力レベル7の児童の学力は、同じと考えてよいのでしょうか。

【A7】

とっとり学力・学習状況調査の学力レベルについては、学力レベルが上がるほど難しい問題を解く力があると考えています。小学校4年生のレベル7と小学校6年生のレベル7では、正答できる問題の難易度は同じです。

ただし、小学校4年生の学力レベル7の児童が小学校6年生のレベル7の問題を解けるかという、解けない可能性が高いです。これは、学習指導要領により学習内容が定められているため、小学校6年生のレベル7の問題を小学校4年生の児童は未習であるからです。

【Q8】

小学校6年生での学力レベルが3(小学校6年生の中では一番低い学力レベル)の場合、学力レベル3より下のレベルがつけられない状態になっています。

この場合の学力レベルは、どのような基準でつけているのですか。

【A8】

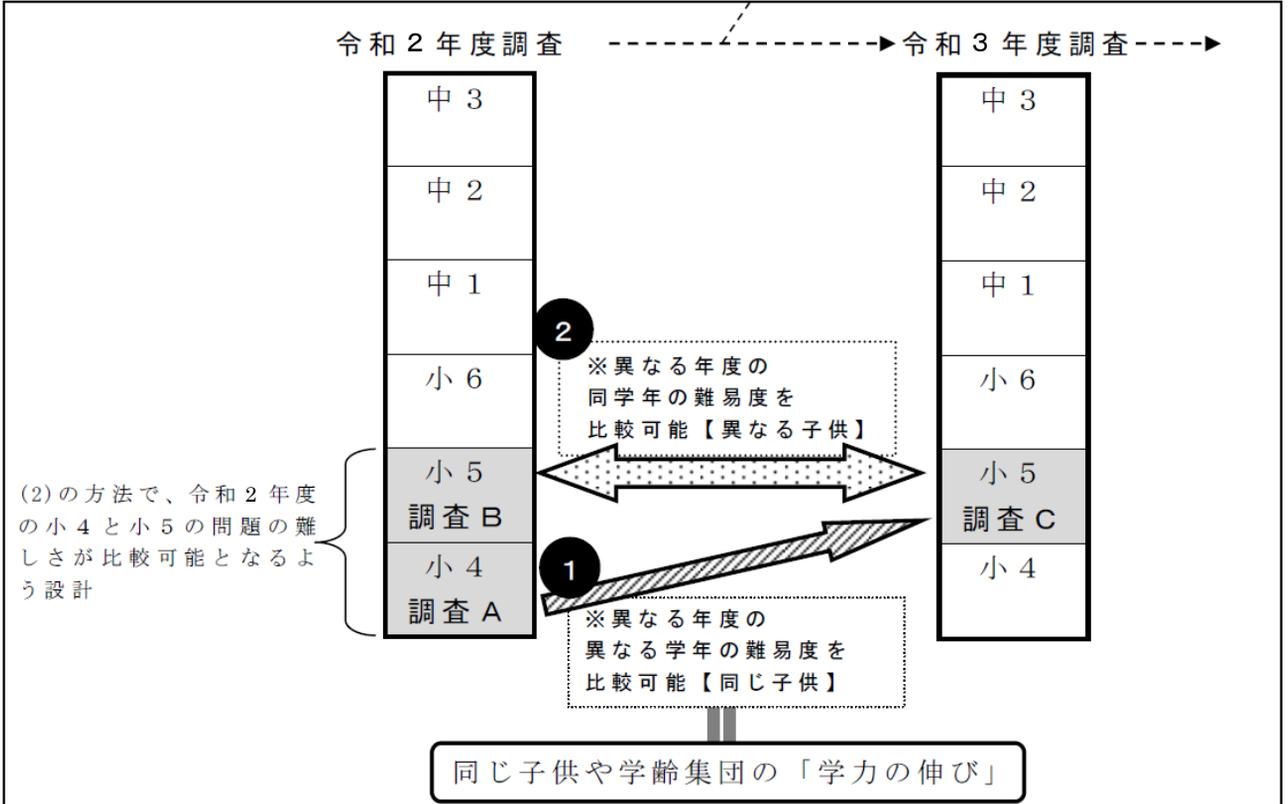
小学校6年生の調査において学力を測定できる問題の範囲は、レベル3からレベル9と設定しています。レベル3の問題に1問でも正答していれば、レベル3の学力がある可能性があるため、レベル3に位置付けられるようになっています。この場合、レベル3を明らかに下回るのは、正答数が0問の場合であり、その場合は、レベル自体が表示されないこととしています。

(3)とっとり学力・学習状況調査の設計

(1)、(2)に基づき、本調査では、以下のような調査設計により問題の難しさを比較可能にして、それに応じて学力の経年変化(伸び)を見ることとしている。

調査の設計【イメージ】

(2)の方法で、令和2年度と令和3年度の問題の難しさが比較可能となるよう設計



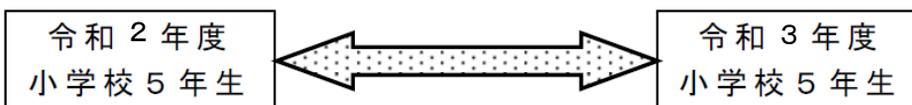
1 【同じ子供たちの「学力の伸び」】

- ・ 学年が上がった子供たちの結果を比較可能
(例) 令和2年度の小4と令和3年度の小5



2 【異なる年度の同じ学年の子供たちの結果】

- (例) 令和2年度の小5と令和3年度の小5

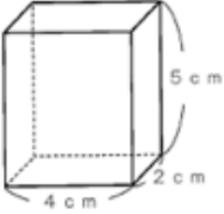
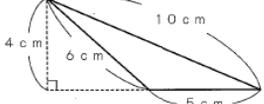


(4)本調査における「学力の伸び」の捉え方

ア 「難易度」について

本調査では、学力を「どのくらい難しい問題に正答できるか」で捉えるために、調査結果を分析し、全ての問題に難易度を設定している。

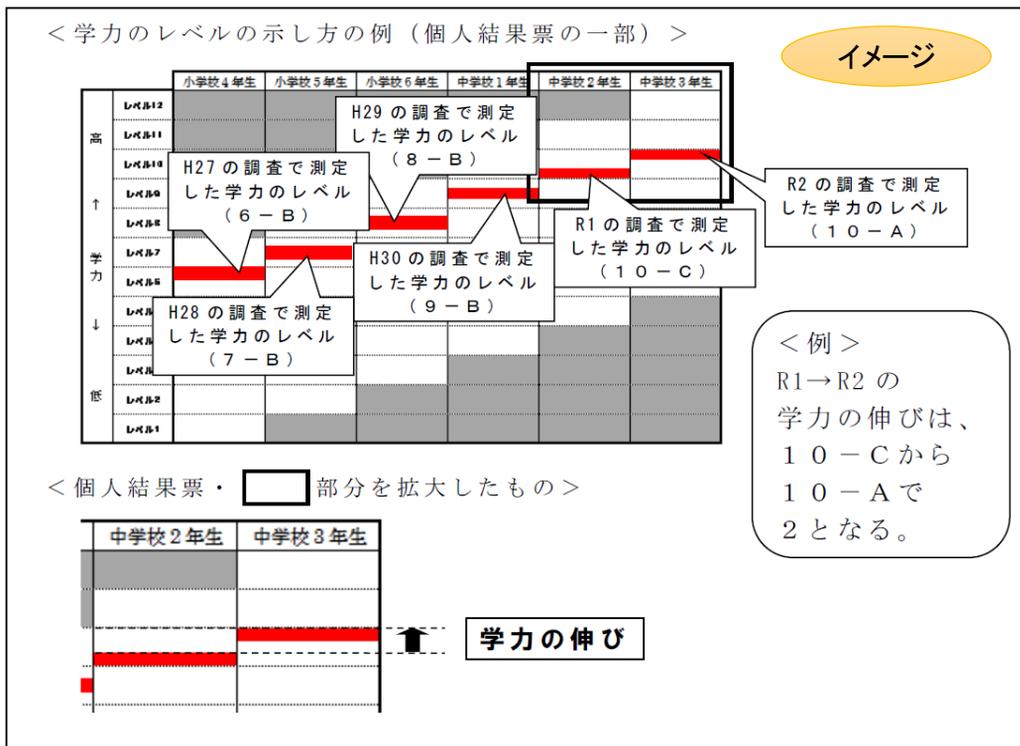
<難易度の例 求積の問題>

| 問題例 | 問題の難易度 |
|---|--|
| <p>次の図のような、たて、横、高さがそれぞれ 2 cm、4 cm、5 cm の直方体の体積を求めましょう。</p>  | <p>4</p> <p>与えられた数値全てを使って体積を求める問題である。結果を分析し、問題の難易度は「4」となる。</p> |
| <p>次の図は、三角形の面積を求めるために、直線の長さを測って書き入れたものです。この三角形の面積を求めましょう。</p>  | <p>6</p> <p>与えられた数値から必要な数値を取捨選択する問題である。結果を分析し、問題の難易度は「6」となる。</p> |

イ 「学力の伸び」について

本調査では、年度間の学力のレベルの差を「学力の伸び」と捉えている。下図は、個人結果票の一部を拡大したものである。児童生徒には、学力のレベルがバーの位置で示される。前年度のバーの位置と、今年度のバーの位置を比べると「学力の伸び」が分かる。

「学力の伸び」は学力のレベルを 36 段階に分けた中でのレベルの差で測っている。



*今後、実施年数を重ねていくとこのような表になっていきます。